

西の湖および伊庭内湖におけるホンモロコ稚魚の生息状況

寺井章人・磯田能年

1. 目的

西の湖および伊庭内湖では、ホンモロコ資源が回復傾向にあり、両内湖で成育した稚魚が琵琶湖へ移動し、琵琶湖における漁獲に貢献している。一方で釣り、タモすくい、投網などの遊漁が盛んになり、特に親魚の集中する流入河川では遊漁者が殺到し再生産への影響が懸念されるようになった。これを受け、ホンモロコの産卵保護を目的に、滋賀県内水面漁場管理委員会の指示により 2017 年から西の湖流入河川（山本川）、伊庭内湖流入河川（瓜生川および躰光寺川）の主要な産卵区間において、4 月と 5 月の水産動物の採捕が禁止となった。

この委員会指示の効果を評価するために西の湖および伊庭内湖(大同川を含む)内のホンモロコ稚魚の生息状況を調査した。

2. 方法

西の湖では 2022 年 5 月 16 日から 8 月 23 日にかけて、伊庭内湖では 2022 年 5 月 17 日から 7 月 26 日にかけて、概ね 2 週間に 1 度の頻度でそれぞれ、8 回と 6 回調査を実施した。西の湖では 6 定点、伊庭内湖では 9 定点（水草の繁茂状況等により欠測定点あり）を設け、ビームトロール網(小型底曳き網)によりホンモロコ稚魚を採集し、尾数を計数した。ビームトロール網の開口幅(3m)×曳網距離(m)で曳網面積を算出し、各定点のホンモロコ稚魚の生息密度(尾/m²)を求め、それらの平均値を各内湖の稚魚生息密度の指標とした。

3. 結果

西の湖では 5 月前半から 8 月後半まで稚魚が採捕され、ピークは 5 月前半で、例年よりも早かった。伊庭内湖では 5 月前半から 7 月前半まで稚魚が採捕され、ピークは 5 月後半

でほぼ平年並みの時期だった。両内湖のピーク時の生息密度はそれぞれ、2.05 尾/m² と 0.85 尾/m² で、ともに高い値であった(図 1, 2)。

採捕禁止となった 2017 年以降、西の湖ではピーク時の稚魚密度が 0.57 尾/m²(2021 年)～2.38 尾/m²(2019 年)で推移しており、採捕禁止となる以前の 0.31 尾/m²(2016 年)と比較して 6 年継続して高い値を示している。一方で、伊庭内湖では年によりピーク時の稚魚密度に差が大きく、採捕禁止措置前後で明瞭な差が見られなかった。

ホンモロコ資源の増減には様々な事象が影響していると考えられ、ホンモロコの資源管理のためにも今後も資源動向を把握し、評価していく必要がある。

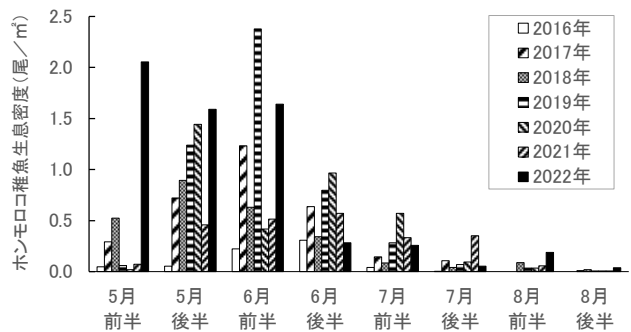


図 1 西の湖におけるホンモロコ稚魚の平均生息密度

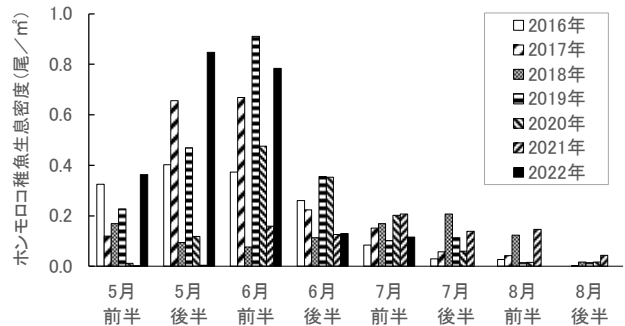


図 2 伊庭内湖(大同川を含む)におけるホンモロコ稚魚の平均生息密度